出向く医療 都市でも

団塊世代の高齢化に備え

医師が診療所や病院で「迎える」のではなく、患者の家や地域に「出向く」。自宅や地域で医療を受けやすくするための取り組みが、大都市で進んでいる。団塊世代の高齢化に伴い、高齢者が激増する事態に備えるためだ。

様々な職種が連携

「先生、口の中が渇いて、しょうがないんです」「おや、どうしたかな。熱があるかな」。千葉県柏市で診療所を開く平野清医師は、女性患者(88)の自宅を訪れると、脈拍や体温を測り始めた。女性は気管支ぜんそくを患い、軽度の認知症もある。70代の親族は「車いすなので、通院は大変。先生に来ていただけるのは助かります」と話す。

この日、平野医師は11人を訪問。ほとんどが高齢者で介護サービスを必要としている。同行した看護師と事務員は診療所に戻ると、それぞれの患者を担当する訪問看護ステーションやケアマネジャーに、薬の変更などを連絡した。

人口40万人の柏市は、高度経済成長期に開発が進んだ東京のベッドタウン。75歳以上の人口は、2010年の3・2万人が25年には6・6万人と、2倍以上に増える見通しだ。一方、市内の一般病院の病床利用率は、11年時点で8割を超える。近い将来、病院のベッドが高齢者でいっぱいになるおそれがある。

入院治療が必要な人を病院が常に受け入れられるようにするため、そして可能な限り自宅で暮らしたいという患者の望みをかなえるためには、医療を自宅で受けやすくする仕組みの整備が欠かせない。

中心となって担うのは、地域の診療所だ。だが柏市内では、二の足を踏む診療所がまだ多いという。市内の診療所医師数は、人口10万人あたり約55人。全国平均の約78人より少なく、外来だけでも忙しいことが一因とされる。

24時間対応などの条件を満たして在宅医療の届け出をした診療所（在宅療養支援診療所）は、全国平均が人口10万人あたり約10カ所。柏市は6カ所程度と少ない。だが同市の10万人あたりの在宅療養支援診療所数は、10年と比べ2倍近くに増えている。

転機は、11年度から柏市と市医師会、東大が共同で始めた在宅医療推進プロジェクト。平野医師も立ち上げ当時から関わっている。柱は、診療所の医師らを対象にした2・5日間の研修だ。同行して在宅医療の現場を見るほか、看護師や介護職、歯剤師、総合病院などトワークをつくる。

研修には、地域でかわる様々な職種の参加する。関係づく少人数のグループに事例検討などを重ね

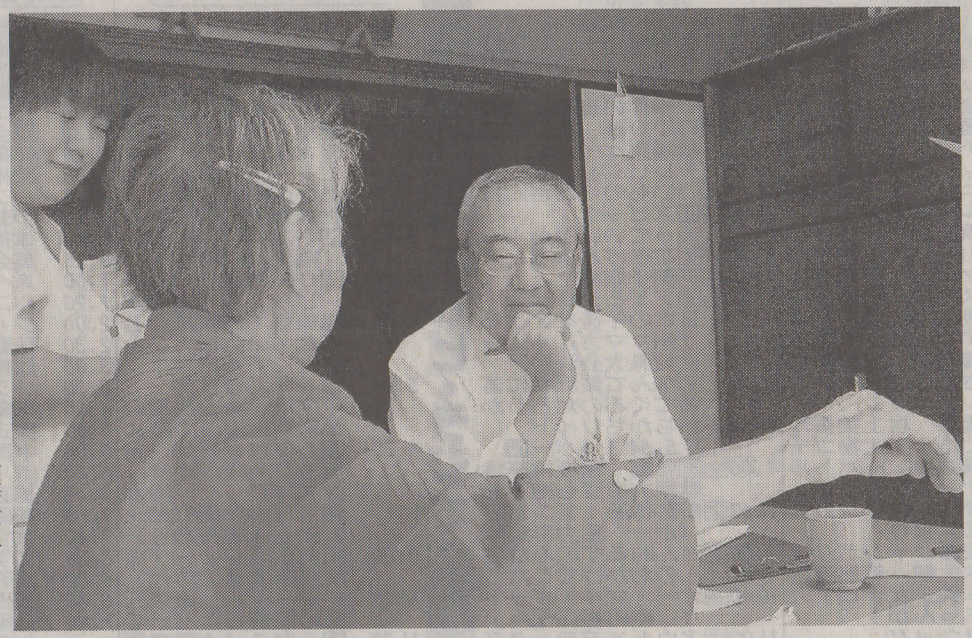
これまで研修に参療所の医師は24人。が在宅医療に取りる。研修後、本格的に を始めた医師は「地ろいろなことができがこんなにいる、と ったのは大きかった

団地で開く保健室

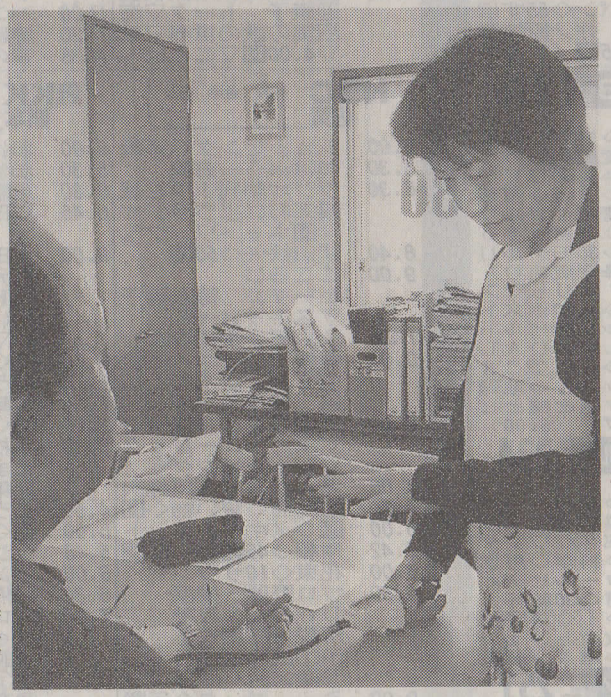
早めの受診を促すため、地域に出て行く病院もある。

埼玉県幸手市の幸手団地では、月2回、健康や医療について無料で相談できる「暮らしの保健室」が開かれる。団地内のコミュニティーカフェや集会所に、近くの東埼玉総合病院から看護師の丑久保広子さんが出向く。ちょっとしたことでも相談してもらって症状の軽いうちに治療を始め、重症化を防ぐ。できるだけ長く地域で暮らし続けてもらうための試みだ。

「こういう症状はかかったらいいのかサービスを使いたど」――。保健室がした昨年8月から今までに、相談をした所の人は160人。%、80代が19%で、%いた。健康診断で混じっていたのを放たり、静脈瘤の手術っていたりしていた保健室訪問をきっかした。丑久保さんは人は病気でも我慢『このくらいでお医行っていいのだろう



患者の自宅で話に耳を傾ける平野清医師＝千葉県柏市



団地内で住民の健康相談に乗る丑久保広子看護師＝埼玉県幸手市

整備急ぐ厚労省

厚生労働省の2008年調査によると、終末期までなるべく自宅で過ご

130905朝